

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03593

研究課題名(和文) 考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of Jomon social studies by interdisciplinary research among archaeology, anthropology and scientific studies on cultural properties.

研究代表者

山田 康弘 (Yamada, Yasuhiro)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：40264270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 33,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は考古学的方法と人類学的方法を合わせた研究方法であるbio-archaeologyの創出と実践、そしてその学問的枠組みの構築を目指したものである。具体的には過去の調査において出土した人骨に対して考古学的方法から分析を行い、そこで立てられた縄文社会に関する様々な仮説に対して、年代測定、ストロンチウム同位体、DNA分析を行うことでこれを検証するというものである。対象遺跡としては愛知県に所在する保美貝塚および伊川津貝塚、および岩手県蝦島貝塚であり、ここから出土した人骨群に対して上記の分析を行った。その研究結果については『人類学雑誌』130-1に特集され、公表されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、bio-archaeologyの研究モデルを提示・実践したことにより、類似したテーマによる研究発表が学会において行われるようになった。この点はこの本研究手法が定着しつつあることを示しており、当初目的の一つを果たしたと言える。また、保美・伊川津・蝦島貝塚出土人骨他の事例を取り上げながら具体的な分析過程を示したことにより、『人類学雑誌』に特集号として取り上げられるなど、学術的にも意義ある研究成果を残すことができた。さらに、この研究成果を一般講演会やカルチャースクールなどを通して一般に還元しており、新たな縄文社会像を普及させるという社会的意義を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This research aims to create and practice bioarchaeology, which is a research method that combines archaeological and anthropological methods, and to construct an academic framework for it. Specifically, the human bones excavated in past surveys were analyzed using archaeological methods, and from these results the various hypotheses about the Jomon society were made. We verified these hypotheses using ^{14}C dating, strontium isotopes, and DNA. The target sites are the Hobi and Ikawazu shell mounds in Aichi prefecture, and the Ebishima shell mound in Iwate prefecture. The results of this research were featured in the "Anthropological Science" 130-1.

研究分野：先史学

キーワード：先史学 人類学 縄文時代 人骨

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本各地、特に渥美半島や瀬戸内において1920年代を中心に出土した縄文人骨群は、戦前・戦後を通して「日本人種論」の中核をなす資料であったとともに、考古学的にも縄文墓制研究の基準資料とされ、これまでも多くの研究者が当該資料を用いて墓制や社会、親族構造の研究を行ってきた。たとえば春成秀爾は、縄文時代晩期には下顎左右の犬歯を除去する2C系抜歯と、下顎左右の第1・第2切歯を除去する4I系抜歯の人々がおり(図1)、これらの人々が同時存在したことを前提として、各々別地点に区分されて埋葬されたという点から(図2)、4I系抜歯の人々がそのムラの出身者で、2C系の人々がムラへの婚入者であるという仮説を立て、縄文時代の社会構造について研究を行ってきた(春成1979など)。この「抜歯仮説」による社会論は、発表後30年あまりを過ぎた現在も書籍や論文に繰り返し引用され、なかば定説化していると言つてよい。

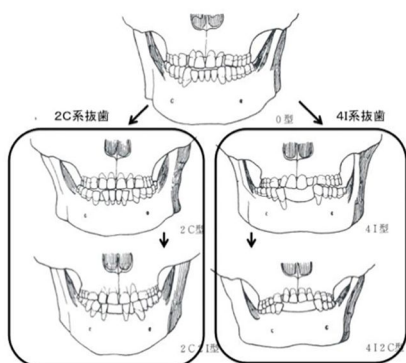


図1 春成による抜歯の二系列

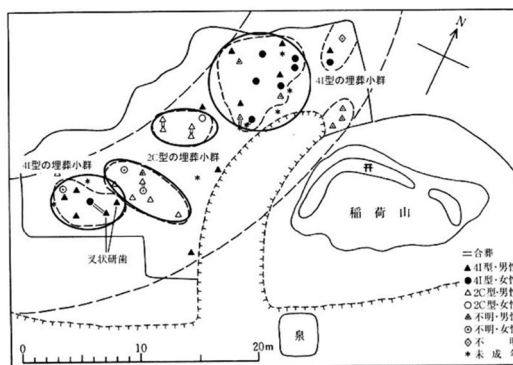


図2 稲荷山貝塚における抜歯系列ごとの埋葬地点

しかしながら、申請者の山田を研究代表者とする最新の研究成果(科研費基盤研究(B)「愛知県保美貝塚出土資料による考古学・人類学のコラボレーションモデルの構築と展開」(2013-2015年度)同じく「考古学と人類学のコラボレーションによる縄文社会の総合的研究」(2010-2012年度))によれば、愛知県吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚・稲荷山貝塚というこれまで縄文社会を語る上で基準資料とされた事例の中には、縄文後期や弥生前期など、時期を違えたものが相当数混在しているということが明らかとなった。たとえば愛知県稲荷山貝塚の事例は、図2のように4I系と2C系の抜歯人骨の埋葬地点が明確に区分されており、春成の抜歯仮説に対して最も整合的な事例と理解されてきたが、稲荷山貝塚出土人骨を年代測定してみると、4I系と2C系の抜歯人骨は同時存在するものではなく、墓域は約800年間にわたって営まれており、当初は4I系だけの墓域であった(期)ものが、その後2C系を主体とするもの(期)に変化し、その後4I系だけのもの(期)へと変化していったことが判明した(下図3参照、左側には人骨番号-抜歯系列-性別を記載)。このことは、図2に示されたような墓域構造が見かけ上のものに過ぎず、従来の研究の前提が誤っていたことを示すとともに、抜歯仮説をはじめとするこれまでの人骨出土例による縄文社会構造論は成り立たないという事実を研究者に突きつけることとなった。したがって、今後縄文社会論を再構築するためには、人骨資料そのものの年代測定を行い、その時期比定に基づき考古学・人類学の各見地から資料の埋葬属性を再検討することが必要となる。これが本研究開始当初の学術的背景である。

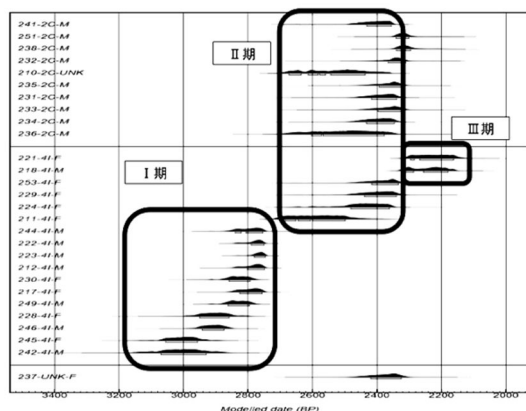


図3 稲荷山貝塚出土人骨の年代測定結果

2. 研究の目的

上述した研究当初の状況をさらに発展させるため、山田らが科研費を受けて行った研究によって、「抜歯仮説」など従来の人骨出土例に基づく縄文社会論は、そのままの状態では、もはや成立不可能であることが明らかとなった。そこで本研究では、改めて出土人骨の年代測定を行い、個々の人骨の帰属時期を決定するとともに、あわせて Sr 同位体分析を行い、墓域内における在地的な人々と移入してきた人々を選別し、母系あるいは父系などといった当時の集団内における系譜的關係性を推定する。それとともに、ミトコンドリアあるいは可能であれば核 DNA 分析を行い、人骨の出自や人骨間の遺伝的關係を把握し、新たな縄文社会構造論を提示する。これらを実践することによって、日本においてはまだ学術的新領域となる bio-archaeology の創出を企図することを目的とする。

3. 研究の方法

これまで、人骨から直接的に年代を測定することは難しいとされてきた(田中 2011 など)。それは、海産物を多く摂取していた場合、いわゆる海洋リザーバー効果(食物連鎖により海産物には古い年代を持つ炭素が含まれているため、それを多量に摂取していた資料をそのまま年代測定すると実際よりも古い値が測定されること)により、正しい年代測定ができないと言われてきたからである。しかしながら現在では、人骨に含まれる炭素・窒素同位体の分析により、生前に摂取した食料の内容が推定でき、どれだけ海産物に依存していたのか判断可能になったことに加え、海洋リザーバー効果に対する年代補正の研究が進んできたことから、人骨から直接的に年代を測定し、これを研究に応用することが可能となっている(たとえば日下他 2015 など)。したがって、人骨から直接的に年代測定を行うことに不安はない。

研究の目的にも書いたように、人骨出土資料を用いた従来の縄文社会論は成り立たないことが判っている。そこで、これまでの研究に使用されてきた資料である渥美半島の貝塚群(吉胡、伊川津、保美)や瀬戸内の貝塚群(津雲・彦崎)の他、東日本の貝塚(蝦島・大洞・中妻など)

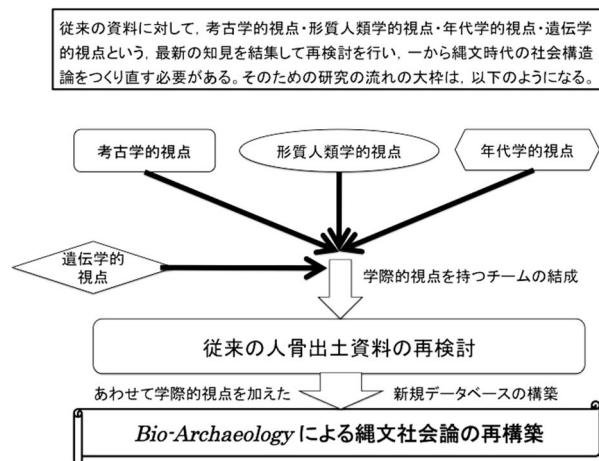


図4 本研究の方法論的枠組み

4. 研究成果

本研究は考古学的方法と人類学的方法を合わせた研究方法である bio-archaeology の創出と実践、そしてその学問的枠組みの構築を目指したものである。具体的には過去の調査において出土した人骨に対して考古学的方法から分析を行い、そこで立てられた縄文社会に関する様々な仮説に対して、年代測定、ストロンチウム同位体、DNA 分析を行うことでこれを検証するというものである。対象遺跡としては愛知県に所在する保美貝塚および伊川津貝塚、および岩手県蝦島貝塚であり、ここから出土した人骨群に対して上記の分析を行った。その研究結果については日本人類学会の機関誌である *Anthropological Science* 130-1 において“Interdisciplinary studies tackling the Jomon social structure”として特集され、1編の総説と4編の論文が公表されている。

また、本研究において、bio-archaeology の研究モデルを提示・実践したことにより、類似したテーマによる研究発表が学会において行われるようになった。この点はこの本研究手法が定着しつつあることを示しており、当初目的の一つを果たしたと言えよう。また、保美・伊川津・蝦島貝塚出土人骨他の事例を取り上げながら具体的な分析過程を示したことにより、『人類学雑

出土人骨を対象とし、墓域構造の把握できるもの、埋葬小群の確認ができるもの、特殊な葬法をとるもの、装身具・副葬品が確認できるものなどを中心に年代測定を行った後、その時間的位置付けを基にしながら、考古学的・人類学的(含む遺伝子分野)な検討を行い、従来の抜歯仮説に代わる新たな縄文社会論を提出することとしたい。

本研究の最大の特徴は、考古学と人類学含むゲノム領域、そして年代学という文化財科学が1チームとなって、共通の目的のもとコラボレーションを行うことにある。この研究の枠組みを図化すると、左の図4のようになる。

誌』に特集号として取り上げられるなど、学術的にも意義ある研究成果を残すことができた。さらに、この研究成果を一般講演会やカルチャースクールなどを通して一般に還元しており、新たな縄文社会像を普及させるという社会的意義を示すことができた。

引用文献

- 日下宗一郎・佐宗亜衣子・米田穰 2015「縄文時代の國府・伊川津遺跡から出土した人骨の放射性炭素年代測定と炭素・窒素安定同位体分析」 *Anthropological Science* (Japanese Series) 123-1。
- 田中良之 2011「AMS 年代測定法の考古学への適用に関する諸問題」『AMS 年代と考古学』学生社。
- 春成秀爾 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』第 40 号。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Takashi Gakuhari, Shigeki Nakagome, Yasuhiro Yamada, Hiroki Oota et al.	4. 巻 3
2. 論文標題 Ancient Jomon genome sequence analysis sheds light on migration patterns of early East Asian populations	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Communications Biology	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s42003-020-01162-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 R. Schmidt*, K. Wakabayashi, D. Waku, T. Gakuhari, K. Koganebuchi, M. Ogawa, J. Karsten, M. Sokhatsky, H. Oota	4. 巻 128(1)
2. 論文標題 Analysis of ancient human mitochondrial DNA from Verteba Cave, Ukraine: insights into the origins and expansions of the Late Neolithic-Chalcolithic Cututeni-Tripolye Culture.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Anthropological Sciences	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1537/ase.200205	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 山田康弘	4. 巻 25
2. 論文標題 中峠遺跡第8次調査第1号住居址内における人骨の出土状況について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 下総考古学	6. 最初と最後の頁 212-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山田康弘	4. 巻 151151
2. 論文標題 洞窟遺跡の墓制	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 63-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷畑美帆	4. 巻 11
2. 論文標題 七五三掛遺跡出土人骨の古病理学的所見	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学黒耀石研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 119-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康弘	4. 巻 229
2. 論文標題 縄文時代早期の人骨出土例における埋葬属性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国史学	6. 最初と最後の頁 39 - 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康弘	4. 巻 31
2. 論文標題 人骨と葬祭制からみる社会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊考古学・別冊	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康弘	4. 巻 150
2. 論文標題 考古学史と社会背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康弘	4. 巻 148
2. 論文標題 人骨に残る儀礼痕跡	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 59-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康弘	4. 巻 29
2. 論文標題 縄文時代の再葬墓	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊考古学・別冊	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TAKAHASHI RYOHEI, KOIBUCHI RYOKO, SAEKI FUMIKO, HAGIHARA YASUO, YONEDA MINORU, ADACHI NOBORU, NARA TAKASHI	4. 巻 127
2. 論文標題 Mitochondrial DNA analysis of the human skeletons excavated from the Shomyoji shell midden site, Kanagawa, Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 65~72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.190307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TAKAHASHI RYOHEI, KOIBUCHI RYOKO, SAEKI FUMIKO, HAGIHARA YASUO, YONEDA MINORU, ADACHI NOBORU, NARA TAKASHI	4. 巻 127
2. 論文標題 Mitochondrial DNA analysis of the human skeletons excavated from the Shomyoji shell midden site, Kanagawa, Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 65~72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.190307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米田 穰	4. 巻 31
2. 論文標題 人骨の分析から先史時代の個人と社会にせまる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊考古学 別冊	6. 最初と最後の頁 44-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Igarashi, Y., Shimizu, K., Mizutaka, S., & Kagawa, K.	4. 巻 171
2. 論文標題 Pregnancy parturition scars in the preauricular area and the association with the total number of pregnancies and parturitions.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 American Journal of Physical Anthropology	6. 最初と最後の頁 260-274
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/ajpa.23961	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 McColl, H., T. Gakuhari, Y. Yamada, M. Yoneda, H.Oota, et al.	4. 巻 361
2. 論文標題 The prehistoric peopling of Southeast Asia.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Science	6. 最初と最後の頁 88-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1126/science.aat3628	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tsutaya, T., T. Takahashi, R. Schulting, T. Sato, M. Yoneda, H. Kato, A. Weber	4. 巻 20
2. 論文標題 Effect of lipid extraction on archaeological fish bones and its implications for fish bone diagenesis.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Archaeological Sciences: Reports	6. 最初と最後の頁 626-633
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jasrep.2018.05.026	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kusaka, S., Y. Yamada, M. Yoneda	4. 巻 167
2. 論文標題 Ecological and cultural shifts of Holocene hunter-gatherers paralleled with environmental changes	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 American Journal of Physical Anthropology	6. 最初と最後の頁 377-388
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/ajpa.23638	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米田 穰	4. 巻 143
2. 論文標題 骨考古学からせまる社会の複雑化 - 人間行動生態学の視点 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 板橋悠・米田 穰	4. 巻 714
2. 論文標題 人骨の化学分析による食と社会の復元	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田康弘	4. 巻 214
2. 論文標題 死体を展示するということー縄文人骨の展示における諸問題を考えるー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 285 - 302
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日下宗一郎	4. 巻 143
2. 論文標題 ストロンチウム同位体比による移動と集団構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 山田康弘・米田穰・坂上和弘
2. 発表標題 岩手県蝦島貝塚および岡山県彦崎貝塚出土人骨の年代測定による墓域構造の検討
3. 学会等名 第74回日本人類学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田康弘
2. 発表標題 縄文時代におけるいわゆる「廃屋墓」をめぐる諸問題 - 姥山貝塚・加曾利北貝塚検出例を中心に -
3. 学会等名 日本考古学協会第86回総会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷畑美帆
2. 発表標題 墓から出土する資料から感染症を考える 先史から近世まで
3. 学会等名 駿台史学会2020 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 五十嵐由里子
2. 発表標題 縄文および弥生集団の人口構造
3. 学会等名 第73回日本人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田 康弘 米田 穰 平田 和明 水嶋 崇一郎
2. 発表標題 西広貝塚・古作貝塚出土人骨の年代測定値からみた埋葬小群の形成過程
3. 学会等名 第73回日本人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日下 宗一郎 米田 穰 山田 康弘
2. 発表標題 放射性炭素年代測定による吉胡貝塚出土人骨の帰属年代の解明
3. 学会等名 第73回日本人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日下宗一郎
2. 発表標題 理化学的分析の応用による社会への接近
3. 学会等名 縄文時代文化研究会第二回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田康弘
2. 発表標題 縄文葬墓制研究の課題と展望
3. 学会等名 縄文時代文化研究会第二回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田博樹
2. 発表標題 古代ゲノム解析からみた東アジア人類集団史
3. 学会等名 日本人類遺伝学会第64回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺裕介、太田博樹、徳永勝士、覚張隆史、西田奈央、人見祐基、澤井浩美、Khor Seik Soon
2. 発表標題 縄文人のHLA型推定
3. 学会等名 第28回日本組織適合性学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和久大介、覚張隆史、Guido M. Valverde、長岡朋人、平田和明、豊田敦、米田穰、高橋龍三郎、太田博樹
2. 発表標題 千葉県・西広および祇園原貝塚出土縄文人骨の集団ゲノム解析（第一報）
3. 学会等名 第73回日本人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米田穰・日下宗一郎・山田康弘
2. 発表標題 骨の化学分析からみた食性の変化
3. 学会等名 日本考古学協会2019年度大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五十嵐由里子
2. 発表標題 人骨から推定する縄文・弥生時代の出生率と寿命
3. 学会等名 日本考古学協会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五十嵐由里子，清水邦夫，水高将吾
2. 発表標題 縄文および弥生集団の人口構造
3. 学会等名 第125回日本解剖学会総会・全国学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田博樹
2. 発表標題 伊川津・縄文人ゲノムからみた東アジア人類集団の形成史
3. 学会等名 日本人類学会第72回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水嶋 崇一郎
2. 発表標題 成人期縄文人の橈骨 / 上腕骨長比が際立って大きい点を、未成人骨の分析から考える
3. 学会等名 日本人類学会第72回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日下 宗一郎
2. 発表標題 貝塚より出土した縄文時代人骨の放射性炭素年代測定
3. 学会等名 日本人類学会第72回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田康弘・日下宗一郎・米田 穰
2. 発表標題 人骨の年代測定による葬法および墓域構造の検討
3. 学会等名 日本人類学会第72回大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroki Oota
2. 発表標題 The Jomon genome and migration of anatomical modern humans to East Asia
3. 学会等名 Transeurasian millets and beans, language and genes (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田博樹
2. 発表標題 遺伝人類学からみた東アジア・日本列島への人類の拡散
3. 学会等名 日本旧石器学会第16回大会シンポジウム「日本列島への人類拡散と後期旧石器時代の成立を考える」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日下宗一郎, 山田康弘, 米田 穣
2. 発表標題 放射性炭素年代測定による東海地方縄文時代人の食性と抜歯の時期的変化
3. 学会等名 国際火山噴火史情報研究会2018(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日下宗一郎
2. 発表標題 ストロンチウム同位体分析による移入者検出の展開
3. 学会等名 日本人類学会第72回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐由里子
2. 発表標題 縄文時代の人口構造—人骨から推定する出生率と寿命—
3. 学会等名 日本人類学会第72回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐由里子
2. 発表標題 縄文集団および弥生集団の人口構造
3. 学会等名 第124回日本解剖学会総会・全国学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuhiro Yamada
2. 発表標題 Consideration of Mass Collective Secondary Burials in the Jomon period
3. 学会等名 Jomon Transitions in Comparative Context (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 栗島義昭・山田康弘ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 328
3. 書名 身を飾る縄文人	

1. 著者名 設楽博己・山田康弘ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 264
3. 書名 農耕文化複合形成の考古学	

1. 著者名 阿部芳弘・日下宗一郎・米田穰ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 280
3. 書名 縄文文化の反映と衰退	

1. 著者名 山田康弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 325
3. 書名 縄文時代の歴史	

1. 著者名 太田 博樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 遺伝人類学入門	

1. 著者名 山田 康弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 K A D O K A W A	5. 総ページ数 192
3. 書名 縄文人の死生観	

〔産業財産権〕

〔その他〕

これまでの研究成果等を発信したサイトには以下のようなものがある。

考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築
<https://arch-yamada.hatenablog.com/>
 考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築
<https://arch-yamada.hatenablog.com/>
 考古学と人類学のコラボレーションによる縄文社会の総合的研究
https://blogs.yahoo.co.jp/arch_yamada

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷畑 美帆 (Tanihata Miho) (10440174)	明治大学・研究・知財戦略機構(駿河台)・研究推進員 (32682)	
研究分担者	米田 穰 (Minoru Yoneda) (30280712)	東京大学・総合研究博物館・教授 (12601)	
研究分担者	太田 博樹 (Hiroki Oota) (40401228)	東京大学・大学院理学系研究科(理学部)・教授 (12601)	
研究分担者	齋藤 努 (Tsutomu Saitou) (50205663)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授 (62501)	
研究分担者	石丸 恵利子 (Ishimaru Eriko) (50510286)	広島大学・総合博物館・研究員 (15401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 健 (Takeshi Yamazaki) (50510814)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・室長 (84604)	
研究分担者	坂本 稔 (Minoru Sakamoto) (60270401)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授 (62501)	
研究分担者	五十嵐 由里子 (Igarashi Yuriko) (60277473)	日本大学・松戸歯学部・講師 (32665)	
研究分担者	設楽 博己 (Shitara Hiromi) (70206093)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	
研究分担者	日下 宗一郎 (Soichiro Kusaka) (70721330)	東海大学・海洋学部・特任講師 (32644)	
研究分担者	覚張 隆史 (Gakuhari Takashi) (70749530)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究センター・助教 (13301)	
研究分担者	水嶋 崇一郎 (Mizushima Soichiro) (90573121)	聖マリアンナ医科大学・医学部・講師 (32713)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------